

結と生活文化

合掌造り家屋の茅葺き屋根は風雨にさらされ、通常 20 年から 30 年に一度の頻度で葺き替えなければならない。白川郷では、伝統的に 200 人もの村人が協力して茅葺き作業を行ってきた。その助け合いの精神を「結」（ゆい）と呼んでいる。

結の参加者は、スキルや経験に応じてそれぞれの役割を与えられる。通常は最年長の人作業を監督し、若い人は屋根で作業をする人に草の束を渡したり、作業の後での片付けを担当する。家主の家族は日中は他の村人に軽食を出し、茅葺き屋根の交換が完了したら、参加者全員が参加できる「直会（なおらい）」と呼ばれる食事会を行う。

「結帳」と呼ばれる冊子には、行われた作業や茅葺きの材料、そして食事会の時の酒瓶の数まで、参加者の貢献が記録されている。このような記録の管理は、結の伝統において重要な 2 つの価値である、公平性と互惠性を確保するのに役立つのである。現存する最古の結帳は 1792 年からのもので、この結帳は、白川郷で 2 世紀以上にわたって屋根の茅葺きが共同で行われてきたことの証明になっている。

結は、庄川流域の村々が持つ伝統的な社会的状況によって成り立っている。これらの村は、昔から比較的に閉鎖的なコミュニティで、外部の人との交流は少なかった。村人たちは強い共生意識を持ち、自分たちだけで生きていくと思い、村とその伝統は自分たちが守るべきものだと考えていた。

自分の村から離れることも、外部からやってくることも、ほとんどなかった。これは、土地を売買したり貸したりしてはいけないという地域の慣習によるもので、土地は自分が受け継いで次の世代に引き継ぐものだからである。このような社会構造が、世代を超えた相互の結びつきを可能にした。こうした絆は結だけでなく、冠婚葬祭のような村全体を巻き込んだ行事にも影響した。

今でも白川郷の村人たちは年に 1 回、通常は春か秋に集まり、結の精神で茅葺き屋根の交換を行っている。これは、茅葺き屋根の交換の技術が次の世代に確実に受け継がれるようにするためのものである。また、合掌造りの家を買ったり貸したり壊したりしてはいけないという指針も、何世紀にもわたる村のしきたりを物語っている。